

赤ちゃん竜のお世話係に任命されました 2

### アメリア

結衣の侍女。  
ディランの  
双子の妹。

### オスカー

リヴドールの宰相。  
有能だが無愛想。

### ディラン

結衣の専属護衛。  
ドラゴンやトカゲが  
大の苦手。

### アレク

リヴドールの国王。  
聖竜ソラと共に戦う盟友で、  
結衣とは恋人として  
付き合い始めたばかり。

### ソラ

聖竜。  
魔族から人間を守る  
女神の遣いで、結衣が  
赤ちゃんから育てた。

### リディア

アクアレイト国の王女。  
アレクのことが好きな  
クールビューティー。

### シムド

フィアの父。  
聖火を守る「番竜」の長。  
母親を亡くしたフィアを  
心配している。

### イシュドーラ

魔族の国アスラの王太子。  
フィアの一族が守っている  
聖火を消そうと企む。

### フィア

泣き虫な赤ちゃんドラゴン。  
ソラの弟子になりたいらしいが、  
その理由とは――？

### 菊池結衣

24歳のドッグトレーナー。  
聖竜ソラによって  
「ドラゴンの導き手」に選ばれ、  
異世界に召喚された。

登場人物  
紹介

## 目次

序章	7
第一章 番竜の子ども	20
第二章 強いドラゴンになるための七つの条件	93
第三章 聖なるものの一部	202
終章	262

## 序章

雲一つ見当たらない、青空の下。菊池結衣は初詣帰りの人波に乗り、カラコロと下駄を鳴らして歩いていた。

正月を意識して、めいっばい着飾っている。白や黄色の花が描かれた赤い振袖姿で、短い黒髪に牡丹の花飾りを付けていた。巾着と屋台で買ったフライドポテトの入ったビニール袋をぶらぶらと揺らしながら、帰省中の実家に入る。

「ただいま」

居間に顔を出した結衣は、ソファアに寝そべってテレビを見る二歳年下の弟に、呆れ顔をした。

「隆人、新年早々だししないよ」

「お帰り、姉ちゃん。正月くらいだらけてもいいだろ。友達と初詣なんてよくやるよ。わざわざ人込みに行きたがる気持ちか俺には全然分からないね」

パーカーにジーンズというラフな格好をした隆人は、のそりと起き上がった。染めた茶色の髪はぼさぼさで、ところどころはねている。隆人は結衣とよく似たどんぐり眼を細めて欠伸をした。そこでふいに、にやりと笑う。

「つてか、姉ちゃん、まだ振袖なんだ？」

「うるさい」

「……ぶっ」

結衣は手近にあったクッションを隆人の顔に投げつける。振袖を着ることが出来るのは未婚の女性だけ。つまり、隆人は二十四歳でまだ結婚していない結衣をからかったのだ。

「もう、せつかく隆人の好きなもの買ってきたのに。あげないよ？」

「フライドポテトだ！ すみませんでした、お姉様。お着物がよく似合っていて、美しくていらっしやいます」

「……持ち上げすぎ」

調子の良い弟に溜息を吐きつつも、結衣はフライドポテトの入った袋を差し出した。嬉しそうに受け取った隆人は、さっそくフライドポテトを食べながら、足元に寝そべる黒いラブラドル犬に声をかける。

「クッションを投げるなんて、姉ちゃんは凶暴だよな。そう思うだろ、モモ」

「オンツ」

おばあちゃん犬のモモは、隆人が遊んでくれると勘違いしたのか嬉しそうに吠えた。前足を隆人の膝にのせ、期待を込めた目で見上げている。

結衣は居間とつながった台所に行つて、冷蔵庫を開けた。ミネラルウォーターを取り出し、それをグラスに注いで一口飲むと、隆人に冷たい目を向ける。

「隆人、いたいけなモモに何言つてんの？ モモは私のこと、凶暴だなんて思つてないもんね？」

「オンツ」

モモはまた吠え、パタパタと尻尾を振った。

「ほら〜」

笑顔になる結衣。隆人はおざなりに返事をする。

「はいはい。でも姉ちゃん、そんな格好するなんて珍しいな。いつもは動きやすさ第一って感じなのに」

「私だつて、たまにはこういう格好もしたくなるの。つていうか、少しくらい褒めたらどうなの？」

「えー？ ……馬子にも衣装？」

「それ褒めてない！ つたくもう。あれ、そういえばお父さんとお母さんは？」

「初詣デートだつて」

「そう……相変わらず仲良いわね」

夫婦仲が良くて結構だが、子どもとしては少々呆れてしまう。

「私、着替えてくるわ」

「うん」

隆人は頷くと、テレビ画面に目を向けた。正月番組が放送されていて、赤や白に塗られた豪華なステージに、コメディアンが現れたところだった。

結衣は隆人の笑い声を聞きながら、二階の自室に向かった。

結衣は部屋に入るとすぐ、扉に鍵をかけた。

六畳の部屋にはベッドや机、クローゼットや本棚などが置かれている。そして犬の世話に関する本や雑誌、犬のぬいぐるみや置物があちこちにあった。子どもの頃から犬が大好きな結衣は、ドッグトレーナーの仕事をしている。

「まったく、隆人のやつ。アレクさんの爪の垢でも吞ませてやりたいわ」

結衣はぼやきながら、全身鏡を覗き込む。髪の流れをチェックしていたら、顔が自然とにやけた。今から二ヶ月くらい前に起きた、とある出来事を思い出したからだ。

結衣はその日、異世界に召喚された。人間と魔族が暮らし、魔法が存在するファンタジックな世界だ。そこにあるリヴィドールという国で、結衣は『ドラゴンの導き手』として、聖竜の赤ちゃんを訓練したのである。

そこで生活するうちに、結衣はリヴィドール国の若き国王アレクと親しくなり、なんと交際することになったのだ。

結衣は、左手首に結んでいる飾り紐をちらりと見下ろした。青い紐に、小さな金属製の飾りが付いている。元々はアレクの髪を飾っていたもので、向こうの世界から地球に戻る直前、アレクからもらった。あの国ではプロポーズを意味するらしいが、その話は一旦保留してもらい、ひとまず交際からスタートすることになっている。

「アレクさん達、元気にしてるかな？」

実は今日、再びあちらの世界へ行くつもりで、結衣は少し前から準備を進めてきた。柄にもなく振袖を着たのも、アレクに見せたかったからである。

結衣はウキウキしながら、クローゼットから旅行鞆とお菓子などが入った紙袋を取り出した。次にあちらへ行く時は手土産を持っていくと決めていたのである。

準備が整ったところで、巾着の中から銀色の鱗を取り出す。これは結衣が異世界で世話をした聖竜ソラの鱗で、結衣はいつも持ち歩いている。

それを手に持ち、心の中でソラに呼びかければ、ソラが結衣を召喚してくれるらしい。

結衣は全ての荷物を持つと、目を閉じた。銀色をした大きなドラゴンの姿を思い浮かべて、呼びかける。

(ソラ、私をそっちに呼んで、お願い！)

少し待ってみたが、何の返事も無い。

(ソラ？ ねえ、ソラってば)

何度か呼びかけてみても、やはり何も起きなかった。

結衣は目を開け、首を傾げる。

「あれ？ やり方あってるよね？」

もしかして間違ったやり方を覚えてしまったのかと不安を覚えた時、突然、足元に黒い穴が出現した。結衣はそのまま落っこちてしまう。

「わ!?!」

まさかの時間差に驚いたのも束の間、結衣は前回召喚された時と同じく、水の中に沈んだ。



その十日ほど前。

異世界のアクアレイト国にある薄暗い洞窟の中で、赤銅色の大型ドラゴンがゆっくりと倒れた。その衝撃で地面が揺れ、風が起きる。洞窟特有の湿気た空気の中に、血のにおいと焦げたようなにおいが混じった。

魔族の国であるアスラの王太子イシュドーラ・アスラは黒衣をはためかせながら、金の目を細める。

この洞窟を守る、『番童』と呼ばれる赤ドラゴン達。その最後尾にいたメスドラゴンが倒れたことで、彼らが体を張って守っていたものが露わになった。

洞窟を塞ぐように立つ立派な神殿だ。白大理石で築かれたその神殿の前で、アクアレイトの兵士達が悲痛な声を上げる。

「メイラ様！」

今しがた倒れた赤ドラゴンは、メイラという名前らしい。

アスラの兵士達が喜びに沸く中、イシュドーラはつまらなく思って鼻を鳴らす。

「なんだ、太陽神の加護を受けたドラゴン一族と聞いて期待したのに、思っていたよりも弱いな。

これなら聖火も難なく消せそうだ」

先ほど倒れた大型ドラゴンの周りには、赤銅色の鱗を持つドラゴンと、黒い鱗を持つドラゴンが、何頭も血を流して倒れていた。黒い鱗を持つドラゴンは、イシュドーラ達が連れてきた凶暴な黒ドラゴンである。

今にも力尽きようとする中、メイラがうなり声を上げる。僅かに首をもたげ、イシュドーラを金の目で睨みつけた。

『立ち去れ、魔族……。私の夫が戻れば無事では済まない……』

イシュドーラはにやりと笑いながら返す。

「残念だが、しばらくは戻らない。その前に俺達の用は終わるだろうよ」

彼はメイラの夫である番童の長達を別の場所におびき出したのである。彼らはまんまと引つかかり、守るべき場所を空けてしまった。

メイラは悔しげに目を細めたが、それが限界だった。頭を再び地面につけ、ゆっくりと目蓋を閉じる。そして、その命の灯火は消えた。

イシュドーラはメイラの死を確認すると、奥の神殿へと剣先を向ける。それを合図に、アスラの兵士達は闇の声を上げ、神殿へと攻め込んでいく。

それを神殿の衛兵達が迎え撃った。

激しい戦闘が繰り広げられる中、アスラ兵の一人が壁際の瓦礫へと槍先を向ける。

「こちらにドラゴンの子どもがいます！」

兵士の声を聞いたイシュドローラがそちらを見ると、瓦礫の中に赤銅色の鱗が見えた。生まれて間もないと思われる小さなドラゴンの子どもが、身を丸くして震えている。

イシュドローラは鼻で笑い、左手を軽く振って言う。

「捨て置き。そんなチビには興味はねえ。それよりも急いで神殿の守りを突破しろ」  
「はっ！」

兵士は敬礼するや、すぐに戦闘に戻った。

やがて神殿の守りが破られ、イシュドローラ達は神殿内に踏み込んだ。

広々とした廊下を通り抜けた先に、見上げるほど大きな扉が現れる。それを開けると、これまた大きな広間があった。

その中央に置かれた黄金の台座の中で、火が赤々と燃えている。

「これが聖火……」

イシュドローラは感慨を込めて呟く。

遙か昔、夜闇を司る男神ナトクが、太陽の女神シャリアにより地底に封じられた。これは、その封印の要となる火なのだ。

封印は少しずつ緩んでしまったため、女神は百年に一度、地上に降臨して封印を掛け直す。その封印の掛け直しの日——降臨祭の日が近づく今こそ、封印を壊す絶好の機会だった。

イシュドローラ達魔族は、自分達をこの世に生み落としたナトクの解放をずっと夢見ていた。それを叶える日がとうとう来たのだ。

イシュドローラは右手を聖火にかざした。

その手から、魔法で作りに出された水が勢いよく放たれる。

「何……？」

大量の水を浴びたにもかかわらず、火は赤々と燃えていた。

それならばと、今度は台座ごと凍らせてみる。だが聖火は氷の中でも燃え続け、魔法で作られた氷の方が弾け飛んでしまった。

他の魔法も試してみたが、炎の勢いは少しも弱まる気配がない。

イシュドローラが苛立ちを覚え始めた時、洞窟の入り口の方からドラゴンの咆哮が聞こえた。声は少しずつ近付いてきて、廊下にいる魔族の兵士達が悲鳴を上げる。

やがて広間の巨大な扉を開けて入ってきたのは、大型の赤ドラゴンだった。

メイラよりも大きくてがっしりとしており、いかめしい顔には迫力がある。これがメイラの夫に違いない。

鋭い金の目が、イシュドローラをじろりと見下ろす。

『我が留守中に、よくも仲間を！ 去れ、魔族！ この火を消すには、聖なるものの一部が必要だ！ お前達のような悪しき者には、それを手に入れることすら叶わないだろう！』

「……聖なるものの一部だと？」

イシュドローラは目を見張る。

聖火を消すのにそんなものが必要だとは初耳だった。ここまで辿り着いた魔族は過去にいなかった



たのだから、それも当然だろう。

眉を寄せるイシュドローラの前で、番竜の長が大きく息を吸い込む。

次の瞬間、真紅の炎が広間いっぱいに広がった。

あまりの熱気に、空気が揺らいで見える。

炎を吐き終えたドラゴンは、黒焦げになったはずのイシュドローラを探す。だが、先ほどまでイシュドローラがいた場所には何もなく、それどころか広間内のどこにもその姿を見つけれなかった。

『おのれ魔族め！ どこに隠れた！』

怒り狂うドラゴンを尻目に、イシュドローラは転移魔法で広間から脱出していた。彼は神殿の廊下にいた兵士達に告げる。

「お前達、撤退だ。手筈通り、速やかに戻れ！」

「は……っ！」

負傷しているため、よろめきながら走り出す部下達。その間を悠然と歩きつつ、イシュドローラは広間の方を振り返る。

先ほどのドラゴンはまだイシュドローラを探し回っているらしく、地響きを伴った足音がここまで聞こえてくる。

「聖なるものの一部……か」

いくら考えてみても、やはり思い当たるものはない。

「まあいい。すぐに見つけてやる」

イシュドローラは口元に笑みを浮かべ、黒いマントをばさりと翻す。そして、その場から忽然と姿を消した。



魔族達が退却したあと、聖火の洞窟には物悲しい鳴き声が響いていた。

「ピウ……ピウ……」

一匹の小さな子どもドラゴンが、メイラの遺体に寄り添うようにして泣いている。

赤銅色の鱗を持ち、頭に四本の角を生やしたそのドラゴンは、金色の目から涙の粒をぼろぼろと零していた。

『フィア、お前は無事だったのだな』

戦いを終えて戻ってきた番竜の長シムドは、我が子の姿を見つけて安堵の声を漏らす。

『メイラ、フィアを守ってくれてありがとう』

シムドは妻であるメイラの額に自らの額を合わせ、目を閉じて別れの挨拶をする。命の失われたメイラの体は、氷のように冷たい。

「ピウ……」

メイラの頭にすがりつくようにして、フィアは泣く。

やがて目を開けて妻の遺体から額を離れたシムドは、上からフィアの顔を覗き込み、その背を鼻

先で優しくつついた。

『母さんのことは残念だが、お前だけでも生きていてくれて良かった』

『ピウ、ピウ』

涙を零しながら、頭を横に振るフィア。

『母さん達が目の前で戦っているのに、何も出来なかった？ ……なあ、フィア。お前は生まれたばかりなのだから、戦えなくて当たり前だ。気にするな』

『ピウ、ピウ……』

しかし、フィアはなおも首を横に振る。

『他の子ども達から、弱虫フィアと呼ばれる？ あの子達だって隠れていたんだ。お前だけが弱いわけではない』

『ピウ……』

フィアは尻尾を体に巻き付け、その場で丸くなった。

母の傍を離れようとしないうが子を見下ろして、シムドは深い溜息を吐く。シムドもまた悲しみに沈んでいたが、番竜の長として他にすべきことがある。

『……私はあちらに戻るぞ』

そう言っただけでフィアの傍を離れたものの、気遣わしげに何度も振り返るシムド。彼が立ち去る足音を聞きながら、フィアは丸くなったまま涙を零し続けた。

きつと仲間達から、長の息子のくせに弱虫だと馬鹿にされることだろう。悔しいけれど、フィア

は実際に弱虫なので、どうしたらいいかわからない。

何もかもが悲しくて、フィアは目蓋をぎゅっと閉じた。

結衣は一瞬、何が起きたか分からなかった。

だが、自分が水の中にいると知るなり、飛び上がるようにして水面から顔を出す。

「冷たい！ 寒い！」

そう言いながら、白大理石で出来た泉の縁ふちに急いではい上がった。

しゃがみ込んで身を縮こまらせ、二一の腕を両手でさする。白大理石で出来た床しずくに雫が落ちて、あつという間に水たまりが出来た。

(そうだ、最初は泉に出るんだった。すっかり忘れてた！)

ここには初めて異世界に召喚された時はもちろん、日本に戻る時にも来たので、ちよつとした馴染みのある場所だ。

小さな泉と、それを囲むように植えられた木々。今はこの世界も真冬なので、木の枝や地面にはまばらに雪が積もっていた。

(あ、いつの間にかまた笛がかかっているわ)

膝に硬い物がぶつかるので見てみれば、オカリナに似た白い笛が首からかかっていた。これは竜呼びの笛というもので、結衣がこちらの世界に來ると同時に首にかかるのだ。逆に地球に戻ると消

えてなくなる。

『ユイ、おかえり！』

少年の弾んだ声がわんわんと響いた。

結衣が後ろを振り返ると、巨大な銀色のドラゴンが、白大理石で造られた建物の前に座っていた。二本の角を持ち、優美な姿をしたそのドラゴンは、よく晴れた空のような色の目を輝かせている。

信じがたいが、このドラゴンが先ほどの声の主だ。魔族から人間を守るために月の女神が遣わした聖竜であり、結衣にとっては赤ちゃんから育てた大事な家族でもある。見た目こそ立派な大人だが、精神的にはまだ子どもだった。

「ただいま、ソラ」

結衣は寒さのあまり震える声で挨拶した。水が凍らないのが不思議なほどである。意を決して立ち上がると、大理石で造られた幅広い階段を一段上がり、乾いている場所に手土産の入った紙袋を置いた。紙袋は濡れたせいでよれてしまい、中に入った水が底から滲にじみ出している。

結衣はがっくりと肩を落とす。今回は前回と違って泉で濡れずに済んだが、せつかくの準備が全て水の泡になった。

泉の縁に座ったまま、頭を突き出すようにして結衣を見下ろしていたソラは、元氣のない様子に首を傾げる。

『いったいどうしたのだ、ユイ。久しぶりに会えたというのに、暗い顔をして』

「せつかくのおしゃれが台無しだし、手土産も包装がダメになっちゃったから、落ち込んでるだ

け……」

結衣が水を吸って重くなった着物を見せると、ソラは青い目をいつそう輝かせた。

『おお！ 確かに美しい格好をしているな。そう嘆く必要はない。我が魔法で乾かしてやろう！』

ソラは、ふうと小さく息を吐く。

すると結衣の体を温かい風が通り過ぎていった。

袖を振ってみたら、雫が一つも落ちてこない。紙袋もすっかり乾いている。

「すごい、本当に乾いた！」

ほっとした結衣は、旅行鞆たびまから鏡を取り出し、髪形や化粧をチェックする。髪形は問題なかったが、化粧は崩れていたので大急ぎで整えた。

そんな結衣の隣で、ソラが自慢げに首を反らす。

『ふふん。結衣が留守にしておる間に、我は魔法が上達したのだ』

結衣は化粧道具を仕舞いながら、つい笑ってしまった。ソラは座っていても二階建ての家より大きいのに、褒めてくれと全身で主張する姿が可愛く見えたからだ。

「すごいよ、ソラ。勉強熱心だね」

『そうだろう？ 我は聖竜だからな、皆を守るためには必要なことだ』

ソラは偉ぶっているが、結衣に褒められたことが嬉しくてたまらないようである。銀色の尻尾をぶんぶん振り、重い風切り音を立てていた。

くすくすと笑っていた結衣は、ソラのために用意した手土産があることを思い出した。さっそく

紙袋から小さめの袋を一つ取り出す。

「これ、ソラへのお土産。何が良いかなくて迷ったんだけど、果物にしたわ。果物好きでしょ？

『林檎』っていうの』

『リンゴか。我がよく食べる赤い実と似ているな』

興味津々な様子で林檎を見下ろし、ソラは口を開けた。放り込めと言いたいのだろう。

結衣は林檎が三個人っている袋から一個だけ取り出し、ソラの口へと放り投げた。ソラが人間なら大豆を一粒食べるような具合なので、結衣は選択を間違えたかなと思つて苦笑する。

「ごめん、ソラには小さすぎたね」

『そんなことはない。とても甘くておいしいぞ。こんなに美味しい木の実はなかなかない。ありがと  
う、ユイ』

ソラは満足げに目を細めた。

『残りはお楽しみにするから、神官達に渡しておいてくれ。ついでに他の荷物も預けてこい。久しぶりに会ったのだ、結衣を乗せて空を飛びたい。第一竜舎のカレンの子が生まれたから、連れて行ってやる。今は盟友もそちらにいるようだしな』

「カレンの卵、孵かえったの？ 行く行く！」

結衣は喜んでソラの誘いに乗った。

ソラが神官を呼ぶと、白大理石の建物——聖竜教会の入り口から様子を窺うかがっていた女性神官達が、こちらに駆け寄ってきた。

長袖の白いワンピースを着た女性神官達は、みな彫りの深い顔立ちをしており、髪はそれぞれ赤や金色や茶色とカラフルだ。彼女達はあつという間に結衣を取り囲み、明るく声をかけてくる。

「ユイ様、お帰りなさいませ！」

「お久しぶりでございます。まあ、なんて素敵なお召し物でしょう！ 天使が舞い降りたかと思いましたが」

「この鞆かばんなども不思議な形ですが、素敵でございますね」

「さすがは異世界からのお客様ですわ。前に着ていらした作業着という衣服もお似合いましたけど、私、こちらの方が好きですわ。色鮮やかで刺繍ししゅうも細やかで」

ものすごい勢いで口々に言う神官達。

結衣は彼女達が落ち着くのを待ってから口を開いた。

「お久しぶりです。褒めてくれてありがとうございます。私の国では特別な日に着る、伝統の衣装なんです。あちらで新年のお祝いがあったので、そのまま着てきたんです」

「そうなのですね。あら、御髪おみげが乱れていらつしゃいますわ。……これで大丈夫です。お可愛らしいですよ」

「ありがとうございます」

結衣が神官に礼を言うと、痺しびれを切らしたソラに呼ばれた。

『ユイ、早く行こう』

「あ、うん！ ごめんなさい、神官さん達。ソラが呼んでるので行きますね。この荷物、預かって

もらってもいいですか？」

「ええ、もちろんです！」

「あとで神官さん達にもお土産を渡しますね！」

快く引き受けてくれた神官達に笑いかけ、結衣は身を翻ひるがえす。そして下駄をカラコロと鳴らしながら、ソラに駆け寄った。

ソラは地面に身を伏せ、尻尾側から背中の上るよう結衣に言う。振袖姿の結衣は動きにくかったけれど、どうにかよじ上った。

『よし、準備できたな？ 行くぞ！』

「うん！」

ソラは勢いよく羽ばたき、空へと舞い上がった。

第一童舎の前に到着すると、飼育員達が雪かきしていた。

結衣は彼らに挨拶しながら、一人の飼育員が開けてくれた鉄扉から童舎の中へ入る。ソラは体が大きすぎて入れないので、外で待っているという。

童舎に入った途端、藁わらと獣のにおいがむわつと立ち込めた。

第一童舎に住む中型ドラゴン達は薄闇を好むので、出入り口付近の壁に設置された明かりと、天井にある明かりとりの窓から入り込む光だけが頼りだ。

そんな薄暗い童舎だが、結衣が探していた人物はすぐに見つかった。

一人の青年が一番奥にある檻の前で、中型ドラゴン達のリーダーである、ニールムというドラゴンに話しかけている。

「アレクさん、お久しぶりです！」

結衣が明るく挨拶すると、青年——アレクシス・ウィル・リヴィドール三世が振り向く。童舎の薄闇の中でも、その輝くような美貌は健在だった。

（久しぶりに見ると強烈だわ。本当に綺麗……）

短い金髪は柔らかそうで、肌は透き通るように白い。さっきまで飛行訓練をしていたのか、深緑色の防寒着を身に着けている。彼がこちらへ歩きながらゴーグルを外すと、傍に控えていた飼育員が素早く受け取った。アレクはこの国の王なのだ。

結衣の前まで来たアレクは、緑の目で結衣を見つめた。とても優しそうな雰囲気があり、美貌とも相まって天使のようだ。結衣は思わず拝みたくなる自分に、心の中でツツコミを入れた。

（一応、彼氏なんだから拝んじゃ駄目よ。……というか、あれって夢じゃないのよね？）

こうして再会してみると、結衣がアレクと付き合うことになったのは、夢だったのではないかと思えてきた。

「お帰りなさい、ユイ殿。……いえ、ユイ。あなたが来ると分かっていたら、のんきに訓練などしていないで迎えにいきましたのに」

残念そうに肩を落とすアレク。

そういえば別れ際に、互いを呼び捨てにしようと約束していたのだった。それを思い出しながら、

結衣は慌てて両手を振る。

「そんな大袈裟な」

「恋人との久しぶりの再会なんです。大袈裟だなんてことはありませんよ」

「は、はい……」

にっこりと微笑むアレクに、結衣はぎくしゃくと頷く。少し離れている間に、アレクの美貌への耐性が弱まってしまったらしい。会えて嬉しい反面、どうにも緊張してしまう。だが、アレク自身の口から『恋人』という言葉が出てきたので、心の中ではガッツポーズをしていた。

（良かった！ 夢じゃなかった！）

こんな優しいイケメンが結衣の彼氏だなんて、やっぱり信じきれないが、これは現実なのだ。

結衣が胸を撫で下ろしていると、アレクがこちらをまじまじと眺めているのに気付いた。

「え、何ですか？」

まさか、まだ化粧や髪に乱れがあったのかと、結衣は意味もなく指先で髪を引っ張ってみる。そわそわして落ち着かない結衣に、アレクはやんわりと微笑んだ。

「その衣装、とても美しいですね。ユイによくお似合いです」

「……あ、ありがとうございますっ。これ、私の国の伝統的な衣装なんです。新年のお祝いのために着たんですが、異文化交流のつもりでそのまま着て来ちゃいました」

本当はアレクに見せたかっただけなのだが、そう口にするのはなんだか恥ずかしくて、結衣は適当なことを言っただけで誤魔化した。

「刺繍や髪しじゆうの飾りなど、どれをとつても繊細で見事です。異世界の姫だと言われても納得です」  
「いえいえ！ 私は庶民ですよ。……というかこれ、そんなにすごいですか？」

結衣は袖を持ち上げて、花の刺繍を眺める。確かにこの着物は高価だが、一般庶民でも買える程度の品だ。もし姫が着るとしたら、もっと豪華な着物だろう。

「ええ、刺繍だけを見ても王族が持つような品だと思います」

「そうですね……」

いまいちピンと来ない結衣は、首を傾げるばかりだ。結衣にとっては「似合っている」という一言だけで充分嬉しい。ついにやけそうになるので、さっきから表情を取り繕うのが大変だ。

「あんまり綺麗なので、天使かと思いました」

「そ、それは言いすぎですーっ」

さっき女性神官も似たようなことを言っていたが、結衣には過ぎた褒め言葉だ。恥ずかしさのあまり、全身にかゆみを覚える。

話題を変えよう。そう決意して視線を横の檻かじにずらした結衣は、そこに見覚えのあるドラゴンの姿を見つけた。

「あ、オニキス！」

「グルルウ」

出入り口に一番近いその檻の中で、黒ドラゴンが身を起こした。つややかな黒い鱗うろこと、鋭い金色の目を持っている。首の後ろや尾には棘とげ状のコブがついていて、どこもなく凶悪な外見だ。

気性の荒い黒ドラゴンは、人間に味方するドラゴンと敵対し、魔族側についている。だが、オニキスとは結衣が魔族の国に誘拐された時に親しくなり、今では種を越えた友情を育はぐんでいた。

オニキスが近寄ってくるのを見た結衣は、飼育員に頼んで檻の鍵を開けてもらった。「気を付けて下さい！」という彼の忠告も気にせず、軽い足取りで中に入っていく。

「久しぶりー！ 元気にしてた？」

「ルウ」

オニキスは頭を低くし、こちらに顔を近付けてくる。結衣は手を伸ばして、その頬を軽く撫でた。気持ち良さそうに目を閉じるオニキス。結衣は彼が自分を覚えていてくれたことに感動して、笑みを深める。

「鱗がつつやつつやになっちゃって。ここの人達に良くしてもらってるのね」

「グルウ」

気のせいかな、声の感じも前より穏やかになっていた。

「オニキスは賢くて聞き分けの良いドラゴンですよ。この群れのリーダーであるニールムによく従っています。それに、試しに騎竜訓練を試みたら、空を飛ぶスピードがとても速くて、皆驚いていました」

アレクが褒めると、オニキスは誇らしげに首を反らした。

結衣は声を上げて笑う。

「良い子にしてたんだね、オニキス。あなたはアスラ国では凶暴なドラゴンって言われてたけど、

本当は優しいから、私はあんまり心配してなかったよ。元気に過ごさせていて良かった」  
「ルウ」

見かけによらず怖がりなオニキスは、脅かしさえしなければ、優しくして良い子なのだ。飼育員達もそれを理解してくれているようで嬉しい。

結衣がオニキスを撫でてしていると、竜舎の奥から別のドラゴンの鳴き声がした。

「ルル」

そちらを見た結衣は、黄土色の優美なドラゴン——ニールムが、頭でしきりに隣の檻を示しているのに気付く。アレクが思わずという風に笑った。

「ニールムが我が子を紹介したいようですね。ユイ、ニールムとカレンの子に会って頂けますか？」

「もちろんです！ オニキス、またね」

「グルウ」

結衣がオニキスに軽く手を振ると、彼は頷くような仕草をした。結衣は通路に出て檻の扉を閉め、竜舎の奥へ向かう。

ニールムの隣の檻では、赤い鱗を持つ美しいメスドラゴン——カレンがうたた寝をしていた。

「カレンは最近、ああしてよく眠るんです。子どもが卵から孵ったことで、緊張から解放されたのでしょう。カレンの子もよく眠るのですよ。ほら、カレンの翼の下です」

アレクが小声で説明し、カレンが翼で守るようにしているものを示す。結衣がそちらを見ると、大型犬くらいの大きさの赤ちゃんドラゴンが、丸くなって眠っていた。

二人の話し声に気付いたのか、カレンが目蓋を上げ、金色の目を覗かせる。結衣が右手を軽く上げると、カレンは眠たそうだった目をパチリと開けて、頭を持ち上げた。

「ルル」

カレンは嬉しそうに鳴くと、おもむろに赤子の後ろ首をくわえて、結衣とアレクの前に置いた。

赤い鱗はカレンと同じで、つぶらな丸い目は金色をしているのが分かった。赤子は眠いのか、しきりに目を瞬かせて、くあつと欠伸をする。

「わあ、可愛い！ カレンそっくりの美人さんになりそうだね！」

結衣が手放して褒めると、カレンは目を細めて笑ったように見えた。すると、隣の檻にいるニールムが「ルウ！」と鳴く。

「ニールムの方は、自分似だと言いたいみたいですね」

アレクは口元を手で覆い、笑いをこらえながら言った。

「凛々しい目元はお父さん似だと思うよ、ニールム。アレク、この子の性別は？」

「オスです。名前はリウムに決まりました」

「リウムかあ。良い名前だね」

結衣は檻の前でしゃがみ込み、リウムに声をかけた。

リウムはきよんとしてから、「ルル！」と鳴く。なんとなく喜んでるように結衣には思えた。まだ眠たいらしく、リウムはうつらうつらと船をこぎ始める。

——その時、竜舎内にパツと光が差し込んだかと思うと、轟音が響いた。



リウムは仰天し、カレンの足元に逃げ込む。

「落雷ですね。この時期、リヴィドールは天候が荒れやすいのです」

アレクは天井にある明かり通りの窓を見上げながら言った。いつの間にか黒雲が低く垂れ込め、稲光が走っている。

入り口の方から、飼育員達がバタバタと走り回る音が聞こえてくる。「火を消せ！」とか「水を持ってこい！」とか言っているので、先ほどの雷は近くに落ちたようだ。

結衣は驚きすぎて、声も出せずに固まっていた。心臓は早鐘を打っている。

(こ……怖かったー！)

実は、結衣は雷が大嫌いなのである。小さい頃、目の前の木に雷が落ちたのを見て、トラウマになっってしまった。

だが、それを態度に出したり、人に言ったりしたことはない。小学生の時に、誰にも言わないと決めたのだ。

あの頃、クラス可愛い女子が雷を怖がって男子にちやほやされ、他の女子から冷やかな目で見られていた。また、男っぽいタイプの結衣が雷を怖がるわけがないと思われていたものだから、そのイメージを崩せなかったのである。

そんなわけで、雷嫌いは心の奥底に封印して、平静を装ってきた。けれど、こういった不意打ちには弱い。

「――ユイ？」

「だ、大丈夫です！」

黙り込んでいる結衣を不審に思ったのか、心配そうに声をかけてきたアレクに、結衣は不必要に大声を出してしまった。

びっくりしたような顔をするアレク。我に返った結衣は、焦って両手を振る。

「あ、いえ、何でもありません。ごめんなさい！」

その時、ニールムとカレンが激しく鳴き声を交わし始めた。

「えっ、何？ いきなり」

二頭は、まるで口喧嘩をしているみたいだ。

アレクが呆れ顔で言う。

「最近、よく喧嘩しているんですよ。ソラに通報してもらったら、リウムが雷を怖がってすぐカレンの足元に隠れてしまうので、ニールムが『もっと強くなれ』と叱っているんだとか。カレンはそんなニールムに、『赤子に厳しすぎる』と反発しているそうです」

「ドラゴンも夫婦喧嘩するんですね」

その点に関しては、人間もドラゴンも似たようなものらしい。

結衣は雷を怖がる犬のしつけ方法を、頭の中から引っぱり出す。ドラゴンに通用するかどうかは分からないが、気休めにはなるだろうと思い、ニールムにアドバイスした。

「雷嫌いの子には、雷が怖くないってことを教えるしかないよ。怒ったら逆効果。雷が鳴っても平然としてみせたり、むしろ楽しんでみせるの。そしたらね、赤ちゃんも雷は怖いものじゃないん

だっと思えるようになるから」

「ルウ、ルルツ」

ニールムが驚いた様子で鳴く。カレンは知的な眼差しをニールムに向け、穏やかに鳴いた。

「ルールル」

「ルルツ」

二頭が何を話しているのかは分からないが、どうやら夫婦喧嘩は終わったみたいだ。

「恐らく、ユイのアドバイスを聞き入れたんだと思いますよ。ニールムとカレンはとても賢いので、人間の話をよく理解しますから」

アレクがそう言うと、ニールムは肯定するように鳴いた。

「ルル！」

そんな話をしている間に、雨が降り始めたらしい。明かりとりの窓に激しく打ち付ける雨音が竜舎内に響いた。

急に寒くなった気がして、結衣は身震いする。するとアレクが心配そうに言った。

「気温が下がってきましたね。風邪を引く前に城へ行きましょう。ソラに頼めば、雨よけの魔法をかけてくれますから」

「はい」

結衣は頷くと、カレンとニールムを順に見上げた。

「カレン、ニールム、赤ちゃんを紹介してくれてありがとう。この子はきつと二頭に似て、立派に

育つよ」

二頭は声を揃えて「ルル！」と鳴き、親しげに視線を交わし合う。先ほどまでの険悪な空気はどこへ行ったのだろうと、結衣は思った。

カレンはリウムを自分の翼で包み込み、頭を下げる。これからもう一眠りするようだ。

微笑ましい母子の姿に、結衣は目元を緩ませる。

「では行きましょう、アレク。久しぶりに皆と会えるのが楽しみです。アメリカさんやディランさん、元気かな」

「すぐに会えますよ。ちょうどいいので、オスカーも呼んでお茶にしましょうか」

「はい」

アレクの「ちょうどいい」という台詞せうぶに疑問を覚えたものの、結衣はひとまず頷いた。

結衣が王城に入ると、玄関ホールで二人の人物が待っていた。侍女のアメリカ・クロスと、近衛この騎士のディラン・クロスだ。

双子なので茶色い髪と青い目は同じだが、性別が違うせいかな顔はあまり似ていない。とはいえ、伯爵家の生まれだからか二人とも品が良く、雰囲気はよく似ていた。

結衣は下駄を鳴らして彼らに駆け寄る。

「アメリカさん、ディランさん、久しぶりー！」

「ユイ様、ご無沙汰しております。お変わりなくて何よりですわ」

アメリカはアレクと結衣に向けてお辞儀したあと、そう挨拶した。  
「ディランは左胸に右手を当てて礼をとる。」

「ご帰還をお待ちしております。ユイ様がいつ戻られてもいいように、専属護衛として毎日聖竜神殿に控えていたのですが、神官達に邪険にされて、そろそろ心が折れるかと……」  
ディランはそう言って苦笑した。

聖竜教会は、この世界の人々の間で広く信仰されている宗教だ。双子の女神である太陽神シャリアと月神セレナリア、そして月神の御使いである聖竜を崇めている。

女神を祀っている関係上、神官は女性ばかりであるため、神殿の重要な場所は女性しか入れないようになっていた。女性神官達は男性に触れると俗世の穢れがうつると信じているので、男性への当たりがきつい。

以前、ディランが女性神官達からきつい対応をされているのを見たことがある結衣は、困り顔を作った。

「神官さん達、相変わらず男嫌いだね。来るのが遅くなってごめん、ディランさん。次に来る時は手土産を持ってこようって決めてたんだけど、それを買うお金がなかったの。ただでさえお給料が少ない上に、転職先を探しているところだから懐に余裕がなくてさ」

結衣は情けなく思いながらも、正直に話した。

すると、アメリカが目まぐるしく見開き、とんでもないとばかりに叫ぶ。

「まああ！ そんなご苦労をされてまで、手土産を用意して下さったのですか!? 私どもにお気を

遣わないで下さいませ！」

「私があげたかったの。お世話になった人にはお礼をするのが、私の故郷のマナーなんだよ。神官さん達に預かってもらってるから、あとで渡すね」

「そうなのですか……なんとという律義なお国柄でしょう。さすがはユイ様の故国ですね！ では、アメリカも楽しみにさせて頂きます！」

「あ、ありがとう」

キラキラと目を輝かせて迫ってくるアメリカ。その勢いに押され、結衣は一步後ろに下がる。するとディランが、アメリカに苦言を呈した。

「おい、アメリカ。ユイ様が困っていらっしやるぞ」

「も、申し訳ありませんでした」

慌てて身を引くアメリカの隣で、ディランは不思議そうに首を傾げる。

「ですがユイ様、何故また転職活動を？ 陛下とご婚約されたというのに」

「そうですね！ 私、お二人がご結婚なさるのを心待ちにしておりますのよ」

「えっ、いや、まだ交際の段階で……」

何もアレクの前でそんな話題を出さなくてもと、結衣が気まずい思いをしていると、そのアレクがそっと話を遮った。

「二人とも、ユイが困っているからそれくらいにね。ユイ、あなたが段階を踏みたいと言うなら、ちゃんとそうします。今はまだ交際中ということでは」

優しく微笑んでくれるアレクが、結衣には本物の天使に見えた。

「そうです。そうそう」

結衣が便乗して何度も頷くと、アメリカは残念そうにした。だが、デイランは「そうですか」と言いつて、そっけない。『どうせ近いうちに結婚するんでしょう』とでも言いたげだ。

もちろん、結衣はアレクのが好きだし、素敵な人だとも思う。けれど、結婚となると別問題なのだ。違う世界の住人同士ということも気にかかっている。

「ですが、ユイ」

アレクは付け足して言う。

「私が差し上げたあの飾り紐は、是非髪に付けて下さいね。今はせっかく綺麗にまとまっていますから、遠慮しておきますが」

素晴らしい笑顔で、また褒めてくれるアレク。結衣は顔が熱くなるのを感じた。

「あ、ありがとうございます」

顔を隠すため、ぺこっと頭を下げてみたものの、内心の動揺が収まらない。

(褒めてもらえたらいいなとは思ってたけど、実際にこうして褒められると心臓に悪いわ。それに何？ この罪悪感)

ここではドラゴンの導き手と呼ばれ重んじられているが、向こうの世界ではどこにでもいるごく普通の女子だ。アレクに憧れているたくさんの女性達に対して、申し訳ない気持ちになってくる。

(でも、やっぱり好きだなあ)

久しぶりにアレクの優しさを感じて、心が温かくなった。

そこで、ふとクロス兄妹の生温かい視線に気付いた結衣は、いたたまれなくなる。この空気をどうしようかと考え込んでいると、廊下の向こうから黒衣の男がやって来た。

「陛下、ユイ様。お出迎えが遅れまして申し訳ありません」

挨拶しながら足早に歩いてくるのは、三十二歳という若さでリヴィドール国の宰相を務めるオスカー・レドモンドだ。長い黒髪に、紫色の飾り紐を付けている。切れ長の目は琥珀色で、無愛想なせいか冷たそうに見えた。

「オスカー、ちょうど良かった」

アレクはオスカーを振り返り、にっこりと微笑んだ。

「このあと、君をお茶に誘おうと思っていたんだ。ほら、例の件で」

「ああ、あの件ですか。確かにユイ様がいらっしゃる今は、タイミングがよろしいですね」

何やら結衣には分からないことを話し合うアレクとオスカー。質問しようと口を開いた結衣を、オスカーが右手を軽く上げて遮る。

「後ほど詳しくお話しいたします。このような冷える場所で長話するのもなんですから。ところでそちらのお召し物、よくお似合いですね」

オスカーは思い出したように結衣の服装を褒めた。

「ユイの故郷の伝統的な衣装だそうだよ」

「そうなのですか。異界の国の伝統服……。ドラゴンの導き手についての新資料として、非常に興

味深い」

□元にうつすらと笑みを浮かべるオスカー。

(オスカーさん、私のことを研究対象として見てたのか……)

結衣は顔を引きつらせたが、オスカーはそれに気付いた様子もなく踵かかとを返す。

「さあ、こちらへどうぞ。それにしてもユイ様、本当に良い時期にいらっしやいましたよ。何せ百年に一度のことですからね！」

見た目は冷静ながら、オスカーは声を弾ませた。

(え、いったい何事なの!?)

結衣はいつになく上機嫌なオスカーを、ちよつとばかり不気味に思った。アレクは忍び笑いをしつつ、結衣を促す。

「驚いたでしょう？ オスカーがこのような感じになるほどの良いことですよ。楽しみにして下さい」

「はあ……」

結衣は全く想像がつかず、気の抜けた返事をした。



暖炉だんろの中で、火がパチパチと音を立てている。

応接室に案内された結衣は、青いビロード張りの長椅子に座っていた。右隣にはアレクがいて、一人掛けの椅子にゆったりと座っている。

アメリカがティーセットの載ったカートを押してきて、手早くお茶の用意をした。香ばしいにおいと共に、湯気がふわりと広がる。彼女は低いテーブルにカップを並べ終えると、扉の脇に控えているディランの隣に移動した。

それを横目で見ながら、結衣はお茶を一口飲む。冷えた体に温かさが染み入るようだ。

同じくお茶を味わったオスカーは、ティーカップをソーサーに戻して居住まいを直す。結衣もつられてカップを下ろし、オスカーに注目した。

「ユイ様、実は三週間後に降臨祭があるのです」

「降臨祭？」

結衣は首を傾げる。

(なんだかその言葉、どこかで聞いた気がするなあ)

結衣は記憶を掘り起こそうとしてみたが、結局思い出せなかった。そんな結衣に、無表情ながら声だけはやたらと弾ませて、オスカーが言う。

「百年に一度の、降臨祭ですよ！ ちょうど三週間後に双子の女神様が降臨し、民衆の前にお姿を現されるのです！」

オスカーは握った右手を左胸に当て、感慨たつぷりに息を吐く。

「このおめでたい祭典の時期にこうして生きていられることも幸せですが、何よりありがたいのは、

我が国はアスラ国と停戦中だということです。そうでなければ戦争中に祭りに参加するなんて、とても出来ませんからね、私達は非常にツイています」

「女神達だけでなく、新しい聖竜とドラゴンの導き手まで揃うのですから、豪華ですよね」

アレクはにこにこ微笑んでいる。

結衣はその言葉に、また首を傾げた。

「ソラはともかく、私がいて豪華なのかどうかは分かりませんが……」

「ドラゴンの導き手のご来訪に居合わせただけでも、我々は幸運なんですよ、ユイ様。それが今度  
は女神様方、聖竜様、盟友、導き手が一堂に会すのです。素晴らしい奇跡ですよ。我々は本当に幸  
せ者です」

しみじみと呟くオスカー。

結衣はそんなオスカーの様子を怪訝に思う。

「アレク、オスカーさんはいったいどうしちゃったんですか？ 正直、いつもと違いすぎて怖い  
です」

「そう思われても仕方ありませんが、今回ばかりは大目に見て差し上げて下さい。外交の都合上、  
我々の旅に同行することになったので喜んでいんですよ。各国の王族や貴族が集まるとても大  
な場なので、オスカーにはしっかりと働いて欲しいと思っています」

「もちろん、陛下にも頑張つて頂きますよ」

オスカーはしれつと付け足した。

アレクの説明を聞いた結衣は、疑問を口にする。

「旅？ そのお祭りつて、この国で行われるんじゃないんですか？」

「降臨祭はアクアレイトという国で行われます。ユイは太陽の女神シャリア様が夜闇の神ナトクを  
地底に封じた話を、覚えていらつしやいますか？」

アレクに質問され、結衣は前に聞いた話を思い出す。

「確か夜闇の神様が月の女神様に惚れて誘拐して……それに怒った太陽の女神様が、夜闇の神様を  
封じたんでしたっけ？ そのせいで夜闇の神様が魔族や黒ドラゴンを作つて、嫌がらせに人間を滅  
ぼそうとしているつていうお話でしたよね」

「その通り。そして人間を憐れんだ月の女神セレナリア様が、聖竜を遣わして下さっているんです。  
実は夜闇の神が封印されている場所が、アクアレイト国にあるのです。女神様方が降臨されるのも、  
その建物の中なのですよ」

「え？ 夜闇の神様が封印されている場所つて、アスラ国にあるんじゃないんですか？」

結衣は根本的などころに疑問を覚えて、率直に問う。

すると、オスカーが「いいえ」と否定した。

「ナトクが封印されているのは、アクアレイト国の洞窟にある神殿です。その場所はこれまで何度  
か魔族に襲撃されましたが、我々人間は死守して参りました。封印は強固なので、おいそれと解け  
ることはありません。ですが、降臨祭に近いこの時期だけは例外なのです」

「この時期だけ、封印が解けるつてことですか？」

「いえ、解けるのではなく、緩むのだそうです。放置しておけば、夜闇の神ナトクが自らの手で封印を解くでしょう。そのため太陽の女神様が、封印を掛け直しに来られます。月の女神様は、その付き添いらしいです」

「なるほど」

結衣は大きく頷くと、これまでの話をまとめる。

「要するに、百年ごとに封印を掛け直さなきゃいけない。そのために女神様達が地上に来られるから、それを祝うお祭りが開かれるってことなんですね」

今度はアレクが頷いた。

「そういうことです。聖竜であるソラは月の女神に会いに行きますし、盟友である私もアクアレイト国から招待状を頂いています。出来ればドラゴンの導き手も一緒にとのことなので、ユイも行きませんか？」

「いいんですか？ もちろん行きます！」

結衣は即答した。

（リヴィドール以外の国を見てみたいし、平和な旅行なら大歓迎！）

前にも一度リヴィドールの外に出たが、単にアスラ国の王太子に誘拐されただけだし、とても平和な旅とは言えなかった。

（本当は私、一週間くらいいたら日本に戻ろうと思ってただけど……まあいっか。私がこっちにいる間は、向こうの時間は進まないだし）

そう結論づけると、頭の中はすっかり観光気分になった。アクアレイトとはどんな国なのだろうと想像して浮かれる結衣に、オスカーがいつもの冷静な口調で言う。

「ユイ様にも他国の王族や貴族の方々にご挨拶あいさつして頂きますので、行きの馬車の中でその練習をいたしましょう。大丈夫です、私が指南させて頂きますので！」

「え？ 挨拶？」

瞬時に顔を引きつらせた結衣に、アレクが穏やかに微笑む。

「皆さん、ドラゴンの導き手にお会いするのを、とても楽しみにしていらっしやるんですよ。そうと決まれば、ドレスなどの着替えも用意しないとイケませんね。ちょうどユイにプレゼントするつもりだったものがあるので、それを持っていきましょう」

「ドレス？ 着替え？」

楽しそうなアレクと違い、結衣の気持ちは急降下した。リヴィドール国の貴婦人が着るドレスは、その下にコルセットを付けるので苦しいのだ。それに、動きにくい服装は苦手である。

「ええ。降臨祭の前に一週間ほど、長いパーティーが開かれるんですよ。そのための着替えです。

アメリカ、支度しだは任せましたよ」

アレクがアメリカに声をかけると、彼女はスカートの裾すそを持ち上げてお辞儀する。

「はい、喜んで。腕を振るって準備いたしますわ！」

アメリカは意気揚々よつよと答え、嬉しそうに微笑んだ。それを見た結衣は、逃げられないと悟って腹をくくる。

「……よろしく、アメリカさん」

結衣はぎこちない笑みを浮かべ、アメリカにぺこっと頭を下げた。



——一週間後、結衣達は船の上に乗った。

「すごい景色！　きれーい！」

結衣は手すりから身を乗り出すようにして前方を見つめる。

澄み渡った空の下、湖面が太陽の光を反射して、銀色に輝いている。湖の一番奥には、白い石造りの街並みが広がっていた。湖の上に造られた、アクアレイト国の王都だ。

街の後ろには巨大な岩山があり、更に奥には急峻な山脈が広がっている。まるで雪化粧をした牙のような鋭い頂きが、いくつも連なっていた。

山からの風が吹きつけてくるので、船の上はとても寒い。短い髪があつという間に乱れてしまい、髪に結びつけている青い飾り紐がバタバタと暴れていた。

結衣は神官兵の服の上に羽織った毛織のマントに手を伸ばし、フードを引き下ろす。すると少しだけ寒さが和らいだので、ほっと息を吐いた。

『まったく、あの地に行くだけと分かっていたら、我が背中に乗せていったのに』  
船の真横に並んで飛びながら、ソラがすねたように言う。





「船で湖を渡るのが礼儀だっというから、仕方ないでしょ」

護衛の竜騎兵達は例外として中型ドラゴンに乗っても良いが、他の人達は船で移動するのが決まららしい。

結衣は冷たい空気を深く吸い込み、笑みを浮かべる。

「船で旅行なんて久しぶり！魔法で動いてるっていうのが、私の国の船とは違うけどね」

結衣が乗っている船は一見ただの帆船だが、今は帆を畳んでいる。魔法を動力にしているそうで、風もないのにかなりの速度で進んでいた。

ソラは負けじと言い張る。

『我に乗った方が絶対に楽しいぞ！』

「もう、ソラってば。船と張り合わないの！」

『こんなに開けた場所なのに、共に飛べぬなんてつまらない！』

ソラが駄々をこね始める。気持ちは分かるが、アクアレイト国を訪問する際のマナーだと言われれば、そうするしかない。

結衣がソラをどう宥めようかと考えていたら、船室のドアが開き、アメリカが顔を出した。いつも着ている深緑色の侍女服の上に、黒いマントを羽織っている。彼女は寒さで鼻を赤くしながら、結衣に声をかけた。

「ユイ様、そろそろ中にお戻り下さいませ。お召し替えのお時間です」

「あ、もうそんな時間だっけ」

船を降りた足でそのままアクアレイト国の城に向かうので、礼儀としてドレスを身に着けることになっている。

結衣は思わず顔をしかめた。

「ねえ、やっぱりこの格好じゃ駄目？」

「駄目です。正装でご挨拶なさらないと失礼ですわ。ドラゴンの導き手様ほどの国の王様よりも位が高くっていらっしやいますけど、体面というものが……。私、ユイ様が服装一つで誰かに悪く言われたら、とても悲しいですわ」

話しながら想像したらしく、大きな目を潤ませるアメリカに、結衣は慌てて両手を振る。

「ちゃ、ちゃんと着るから。我が儘言ってごめんね」

「……良かった、安心いたしましたわ。ですがユイ様、ドレス映えなさるのですから、そんなに嫌がらなくてもよろしいのに」

表情を明るくしたアメリカだが、今度は不思議そうに首を傾げる。

「動きにくい格好って苦手なの」

結衣は苦笑しながら、ソラに向けてひらりと手を振った。

「じゃあね、ソラ。またあとで」

『うむ。時間が空いたら散歩しよう、ユイ』

「うん、楽しみにしてる」

結衣の返事を聞いたソラは、嬉しそうに尻尾で湖面を叩き、空へと舞い上がる。水飛沫をかぶつ

た結衣は、ソラを見上げて笑った。

「もう、子どもなんだから」

どれだけ図体が大きくなるうが、自分が赤ちゃんドラゴンから育てたソラは、結衣にはとても可愛らしく見えるのだった。

アクアレイト国の港には、多くの帆船が停まっていた。

そこへ結衣達の乗る帆船が水上を滑るようになって着港すると、集まっていた大勢の人々が沸き立つ。花飾りが付いた帽子を被った女性や、青いコートを着た男性など、様々な格好をした人々が口々に叫んだ。

「聖竜ソラ様だわ!」

「リヴィドールの国王陛下は、なんてご立派なの!」

「我が国へようこそ!」

灰色の雲に覆われた空の下、人々の歓声が響く。

外から聞こえてくる声を聞きながら、結衣は扉の前で固まっていた。

薄水色のシンプルなドレスの上に、裏地が毛織物になっている白いマントを着ているので、防寒はばっちりだ。あとは船室から出るだけなのだが、緊張のあまり膝が笑って言うことを聞かない。

デイランが開けかけた扉を閉め、結衣を振り返る。

「ユイ様、降りられないんですか?」

「う、うん。ちよつと待つて、心の準備が……」

結衣は扉の隙間からちらりと見えた光景にますます動揺し、深呼吸をして必死に落ち着こうとする。

「あんなにたくさんの方がいるなんて……! ちよつと多すぎるんじゃない!?」

港いっぱいの人に人が押し寄せている。勢いあまって湖へ落ちないか心配になるほどだ。

アメリカが結衣を宥める。

「聖竜様とドラゴンの導き手様が同時にいらつしやるなんて、滅多にないことですもの。一目見たいと思つて大勢の方がいらつしやるのも当然ですわ。ですが大丈夫です、ユイ様。馬車まではほんの数歩しかありませんのよ。ねえ、デイラン」

「ええ。おかしな輩は私が絶対に近付けませんから、安心して下さい」

クロス兄妹が力強く励ます。

だが、芸能人でも有名人でもない結衣は、あれだけ多くの人の前を歩くと思つと眩暈がしそうだ。ちよつと移動するだけだと頭では分かっているが、足が動かない。

どうしようかと困り果てていたら、船室の扉がノックされた。結衣が返事をする、扉が開く。

「ユイ、どうかされたんですか?」

アレクが心配そうな顔を覗かせた。一向に船室から出てこない結衣を迎えに来たのだろう。その後ろではオスカが怪訝そうな顔をしている。

「や、ちよつと緊張しちゃつて……」